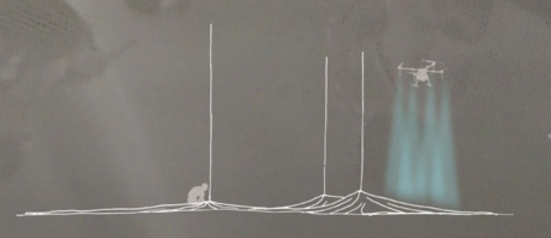
ガラスを纏(まと)う

人類が 6000 年ほど前に製造をはじめたガラス。
当初は装飾品の材料に過ぎなかったガラスは技術改良を重ね、現代では通信光ファイバー、情報機器の薄型ディスプレイなど多分野にわたって高度な進化を続けている。
しかしながら、建築におけるガラスは主体構造に対し副次的な存在のままであるのだ。

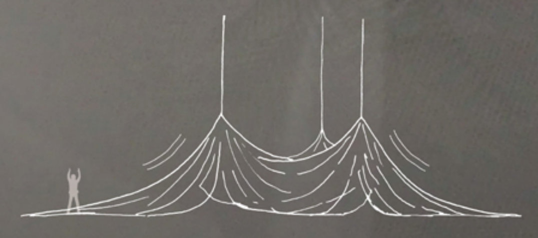
2050 年のガラス空間として、「ガラスを纏(まと)う空間」を提案する。

重力に従ってカテナリー曲線状に持ち上げられた、自立するガラスクロスの構造体。
やわらかな光を内外に拡散する透過性、ガラスクロスのしなやかさとドレープ（ひだ）が生みだす様々な居場所や居かた、重ね合わさる半透明の幕による空間の奥行きや明暗、軽やかさなど従来の RC や鉄骨構造では表現できない、“ガラスそのものを纏う” ことによって生み出される新しい空間。
それは自由なかたちでふわりと空中に現われ、 時が止まったように固体化し、 やがて何もなかったかのように融解され自由なかたちに戻る。そのように流動し循環しつづける空間、アモルファスな空間の概念である。



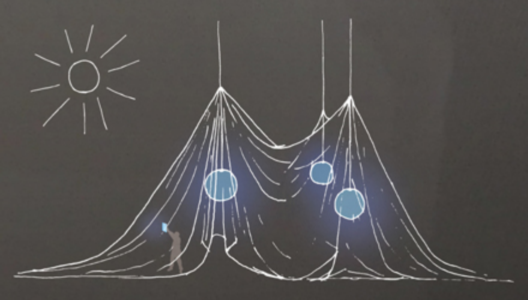
1\. ガラスクロスの敷き込み

建物位置にガラスクロスを敷き込み UV 硬化剤 (※) を散布、吊り上げ用ワイヤーを取り付ける



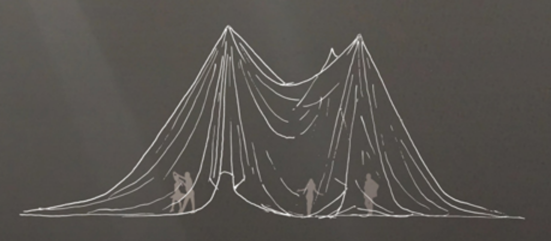
2\. 吊り上げ

吊り上げ用ワイヤーをクレーンで持ち上げる
重力に従って自然にドレープ (ひだ) が生まれる



3\. 硬化／固体化

太陽光と内部の紫外線投光器によってガラスクロスを固める、吊点中央から周囲に広がるドレープが建物全体として釣合うシェル構造をかたちづくる



4\. 完成

硬化後に吊り上げ用ワイヤーを取り除くと自立する無柱の構造体が立ち上がる．吊点の数や位置の調整、ねじれを加えるなどのシンプルな操作によって完成する空間のかたちは様々に変化する

5\. 再生／流動化

役割が終わると融解されガラス素材としてリサイクルされる

※UV 硬化剤：紫外線照射によって 硬化する薬液
2019 年現在、建築構造に適用できる強度は保証されていない

ドレープが居場所をつくる

やわらかく場をつつむ

気配と奥行きを生み出す

ゆるやかに内外をつなぐ

様々な居かたをゆるす